

藤原宮大極殿院の調査

—第182次

1 はじめに

大極殿院は、藤原宮の中心部に位置し、回廊で囲まれた東西約120m、南北約170mの区画である。大極殿院の中央には、儀式の際に天皇が出御する大極殿があり、その南側には磔敷広場を隔てて桁行9間、梁行2間の大極殿院南門が開く。

大極殿院では、戦前に日本古文化研究所が、大極殿と大極殿院回廊とにおいて小規模な発掘調査をおこなっており、回廊や「西殿」、「東殿」、さらに大極殿の礎石位置と建物規模を推定している。

奈良文化財研究所都城発掘調査部では、これまでに藤原宮中枢部の様相解明を目的として、大極殿北方（第20次）、西門（第21次）、東門および東面回廊（第117次）、南門（第148次）、南面回廊（第160次）の調査を継続的におこない、主要な建物の配置と構造をあきらかにしている。2014年度からは朝堂院の北側にある大極殿院内庭の発掘調査に着手した。飛鳥藤原第182次調査は、大極殿院内庭における本格的な発掘調査で、大極殿の前面においてその全容解明を目指した。調査は2014年4月1日に開始し、同年12月17日に埋戻しを完了した。調査面積は1,450㎡である。なお、以下では南北畦より東側を東区、西側を西区とする。

2 検出遺構

基本層序 調査地の基本層序は、上から整備盛土、耕作土、床土と続き、床土の直下に藤原宮期の磔敷がある。磔敷より下位は、東区では上位から褐色砂質土、橙褐色砂質土が薄く堆積し、これより下位には暗褐色土がある。第179次（朝堂院朝庭）の調査成果によれば、磔敷直下の橙褐色砂質土と褐色砂質土とが第二次整地土にあたる。褐色砂質土は東区の中央部から東端にかけて分布するのみで、これ以外の範囲では上位から磔敷、橙褐色砂質土（第二次整地土）、暗褐色土と続く。

西区ではY=-17,673付近より西側で磔敷が削平によりのこらず、代わりに奈良時代の整地土(SX11251)が西区中央部に広がり、これより西側では黒灰色土が露出

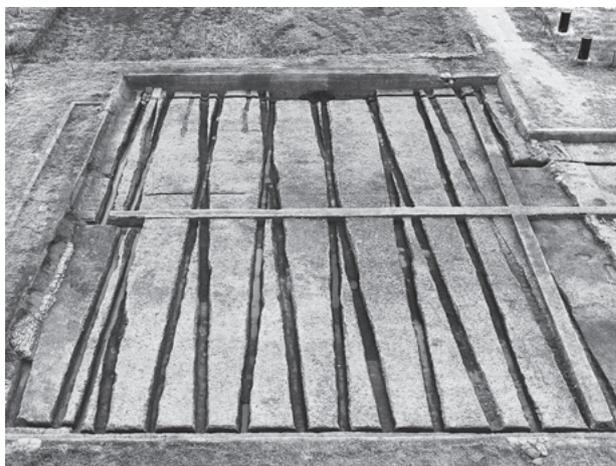


図110 大極殿院内庭の磔敷（北から）

している。このため、Y=-17,673より西側では奈良時代整地土および黒灰色土上面で遺構検出をおこない、次いで必要な範囲でこれらを除去し、藤原宮期以前の遺構検出を試みた。

藤原宮期の遺構

磔敷広場SX10888 東区と西区の東半分では大極殿院内庭の磔敷が残る（図110）。暗褐色土の上に橙褐色砂質土を積み、その上に磔敷を敷いている。磔敷は拳大で、磔敷の厚さは3～5cm。朝堂院朝庭の磔敷とはきわめて類似している。調査区内における磔敷の標高は、東区の南端ではおよそ71.4mで、大極殿院の南面回廊を挟んだ朝堂院朝庭北端付近の磔敷（標高71.5m前後）とほぼ同じである。一方、東区中央から北端の磔敷は標高約71.1～71.2mで、東区南端とは最大で0.2mの高低差があり、南面回廊に向けて高くなる。西区の磔敷も南側が高く北側が低い。運河SD1901Aと重なる部分はやや陥没しており、埋め立て後に沈下が起きたことを示している。

宮造営期の遺構

運河SD1901A 西区の東寄りで部分的に検出した南北大溝。南排水溝で確認したほか、斜行溝SD11250の平面検出等でその西肩・東肩を部分的に確認した。西区の東西畦北側では、その幅は10.0mにおよぶ。また、埋立土上層は黄橙色砂質土と褐色土との互層をなし、版築状を呈している。

南北溝SD10801B 東区の中央部を縦断する南北の素掘溝で、大部分は磔敷に覆われるが、調査区の南端と北端とで確認し、さらに北へ延びることが判明した。また、斜行溝SD11250の発見にともない、東区中央部で同溝の

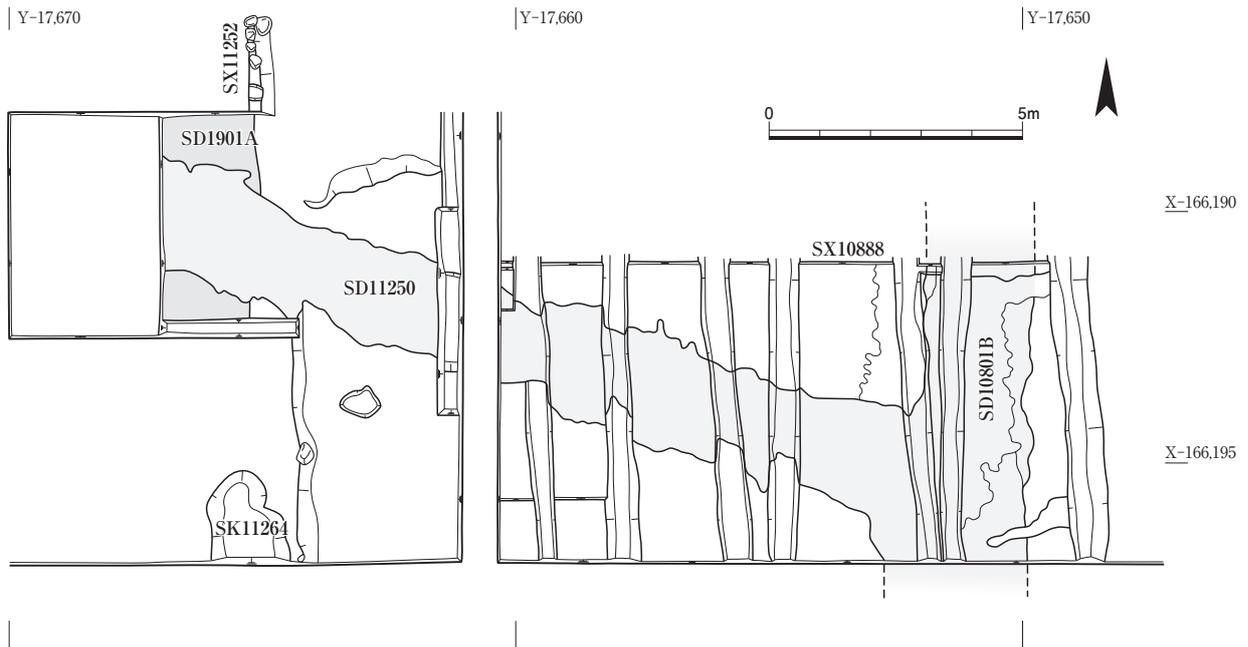


図112 SD11250 遺構図 1 : 150



図113 斜行溝SD11250 (北西から)

確認をおこなった際に、SD10801Bも一部を平面検出している。それらによれば、SD10801Bは幅2.2m、深さ約1.2mで、埋土は上位から褐色土、橙褐色砂質土、青灰色粘土と続く。東西畦のすぐ北側で西北西へと延びる斜行溝SD11250が分岐している。

斜行溝SD11250 東区から西区にかけて検出した素掘溝。耕作溝の掘り下げ時にその存在を認め、15.5m分を

平面検出した。この斜行溝は南北溝SD10801Bから分岐し、運河SD1901Aまでは延びる(図112・113)。SD11250の主軸はおおむね東南東—西北西で、幅は2.0~2.2mである。SD10801Bと同様に、橙褐色砂質土に覆われている。SD10801Bとの分岐点は東区中央部・東西畦のすぐ北側にあたるが、南北方向の耕作溝2条がV字形に交錯するところでもあるため、分岐点の検討は次年度以降とした。また、運河SD1901Aとの関係は、SD11250がSD1901Aの埋立土を掘り込んでいることから、前者が新しいとみられるが、この点も次年度以降に再度検討をくわえることとした。

南北溝SD10705 西区の西寄りで検出した南北方向の素掘溝で、調査区を縦断し、さらに北へ延びる。東西畦の北側で奈良時代の整地層SX11251を除去し、6m分の平面検出と掘削をおこなった(図114)。この範囲では、SD10705は幅約2.3m、深さ約0.9mで、溝心の座標はX=-166,191においてY=-17,677.8である。標準的な層序は上位から①褐色土、②灰白色砂質土、③青灰色粘土、④青灰色砂質土、⑤灰オリーブ色砂である(図116)。人為的な埋立土(①~④)のうち、③・④は埋立土のグライ化相で、土器片、木片、齋串、燃えさし、獣骨、種子等を多く含み、齋串は③の中位付近に集中する傾向があった。⑤は溝機能時の堆積物で、側刻により溝の西肩がオーバーハングした部分を埋めている。①、③・④は東西溝SD10871に共通する埋土で、木片や獣骨等の産状も同じである。既往の調査成果を加味すると、先行朱雀大路東側溝と考えられる。

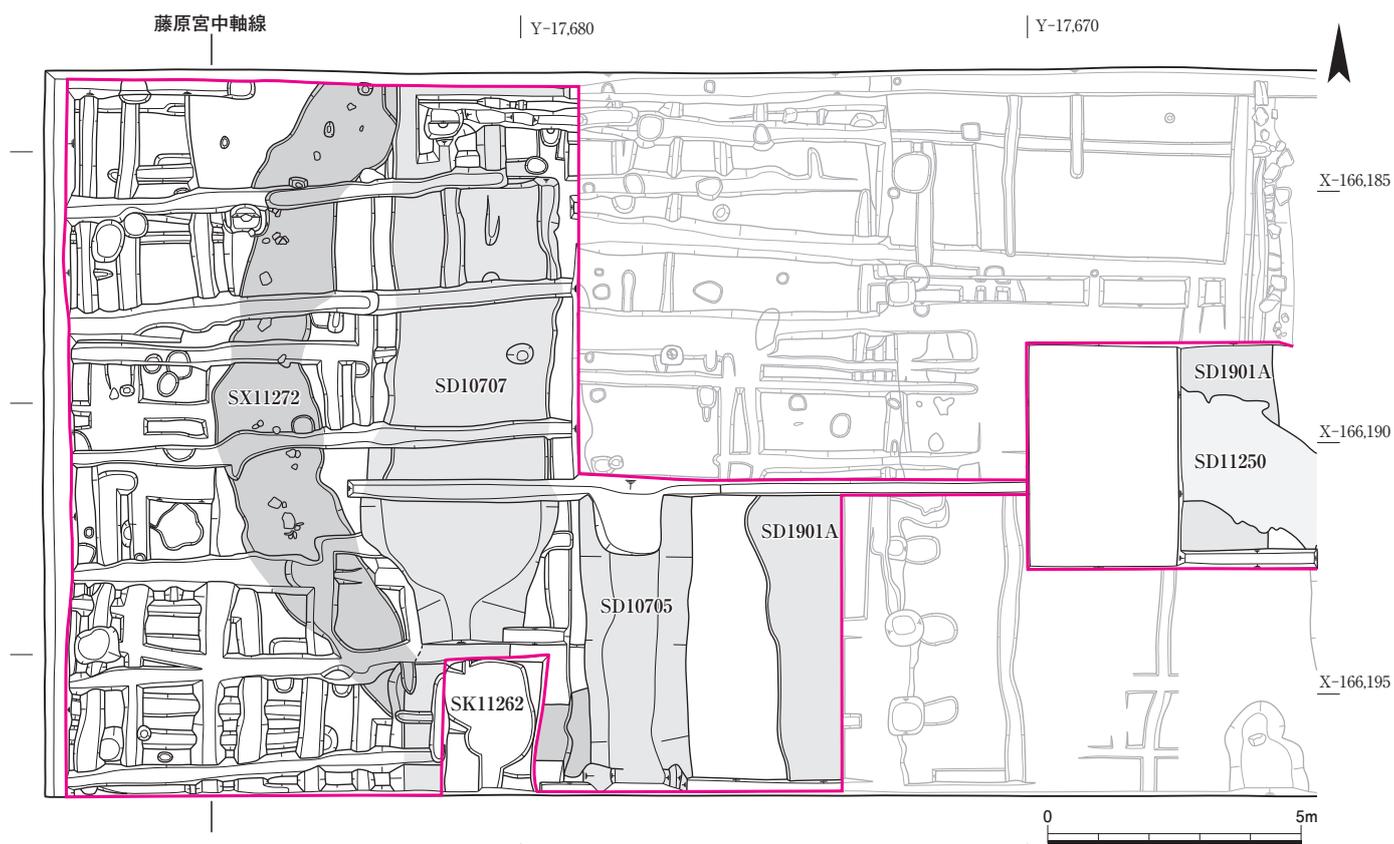


図114 西区下層遺構図 1 : 150

南北溝SD10707 西区の西寄りで検出した南北方向の素掘溝で、SD10705のすぐ西側にある。調査区を縦断し、第20次で検出した南北溝SD1925につづくと思われる。土坑SK11262の北側で、3.3m分について掘り下げたところ、埋土は上位から褐色土、暗褐色土、灰色砂であった。このうち、褐色土と暗褐色土は埋立土、灰色砂は溝機能時の堆積物である。深さは約1.4m以上で、この溝の下底までは完掘していない(図116)。SK11262のすぐ北側までは幅約2.0mでまっすぐ延びているが、掘り下げをおこなった範囲はこの溝がハの字形に広がる部分にあたり、最大幅は3.9mとなる。灰色砂は粗砂と細砂との互層からなり、ごく少量の遺物を含む。

東西溝SD10871 東区の東南隅および西南隅で確認した東西方向の素掘溝で、第160次で検出した同溝が西へ23m分延びることを確認した。第160次ではおもに断面観察により、東西溝SD10871およびSD10873の重複を確認しているが、今回の調査では調査区の南端にあたるため、SD10871のみを確認したにとどまる。東区西南隅で掘り下げをおこなったところ、埋土は上位から褐色土、青灰色粘土で、後者からは土器片、木片、獣骨、種子などが出土した。既往の調査成果を加味すると、先行四条大路北側溝と考えられる。

宮廃絶後の遺構

整地層SX11251 西区中央部で検出した、南北に延びる帯状の整地層。南北方向の浅い溝状のくぼみ(藤原宮廃絶後)を、下位から順に灰色砂礫、暗灰色粘土、黄橙色砂質土で埋めている。灰色砂礫から黄橙色砂質土までを合わせた層厚は、最大で約0.3mである。整地層SX11251はY=-17,673からY=-17,679までのおよそ6m幅にわたる。また、その南限はX=-166,199付近にあり、北側はさらに調査区外に延びる。後述する土器埋納坑SJ11253(奈良時代)や掘立柱建物SB11256(平安時代)は、



図115 西区・宮廃絶後の遺構面(北東から)

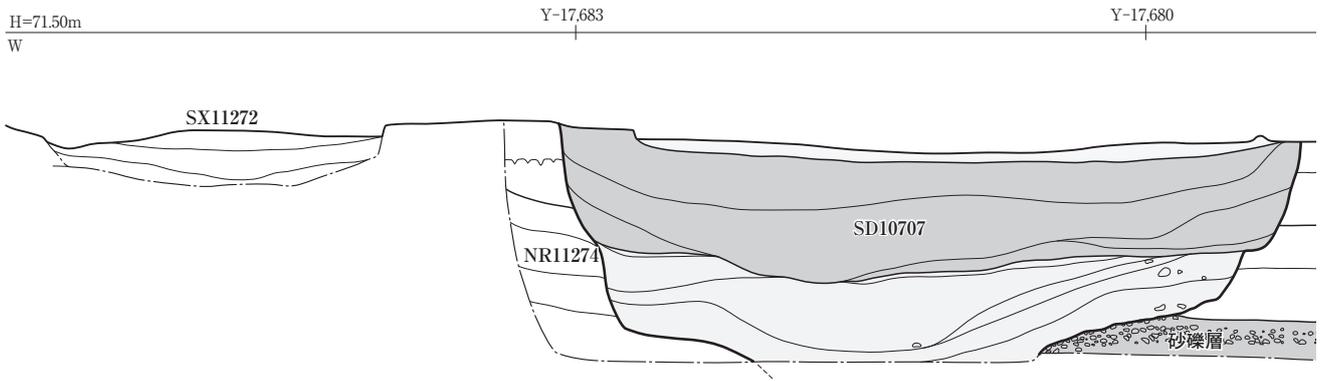


図116 西区東西方向断面図 1 : 40 (X-166.191付近)

黄橙色砂質土の上面で検出している。奈良時代中頃の土器が多数出土した。

建物SB10715 西区西南部で3基の柱穴を検出した。第148次調査で確認していた掘立柱建物SB10715の北側柱列にあたる。今回の調査により、SB10715は桁行6間(12.6m)、梁行2間(4.2m)の東西棟であることが確定した。いずれの柱穴も一辺1.0mの隅丸方形で、うち2基には柱根が残る。これらの柱穴は埋土に礫を多く含む耕作溝より新しい。

建物SB11255 西区西北隅付近で検出した4基の柱穴。東西2間以上、南北2間以上で、調査区外へ延びる。

建物SB11256 西区中央部北寄りで見出した掘立柱建物。桁行3間(6.3m)以上、梁行2間(4.2m)で西側に廂がつき、さらに北へ延びる。柱穴は直径0.6mの不整形円形で、埋土は例外なく黒色土である。複数の柱穴埋土から黒色土器A類の小破片が出土し、平安時代に降る建物である。

柱列SA11257 西区中央部北寄り・建物SB11256の東側柱筋の近くで見出した南北方向の柱列で、2間分・3

基の柱穴を確認し、さらに北へ延びる。南端の1基には柱根が残る。南端から2基目の柱穴からは奈良時代の土器片が出土している。 (森川 実)

土器埋納坑SJ11253 西区中央部で見出した土坑。一辺35~45cmの隅丸方形で(図117・118)、遺構検出面からの深さは15cmである。土坑内部には奈良時代の須恵器杯Bが正位で埋置され、土器の安定のため、直下には数個の小礫を置いていた(図117)。土器内部には和同開珎を5枚おさめる(図119)。重複関係から整地層SX11251より新しい。



図118 土器埋納坑SJ11253 (南から)

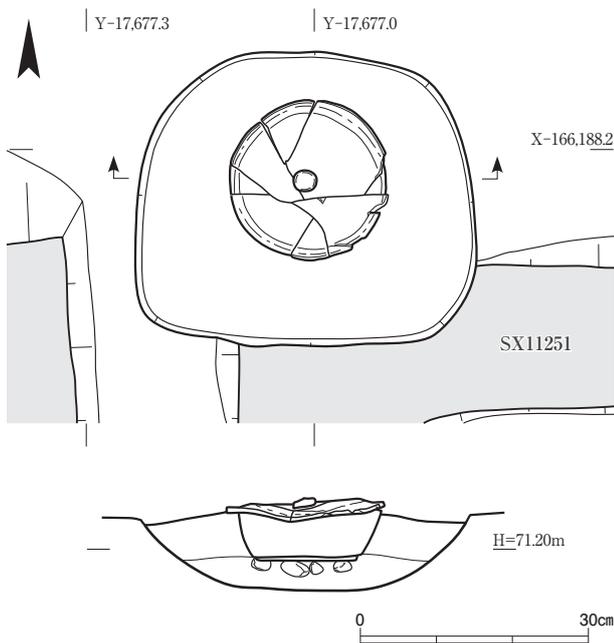
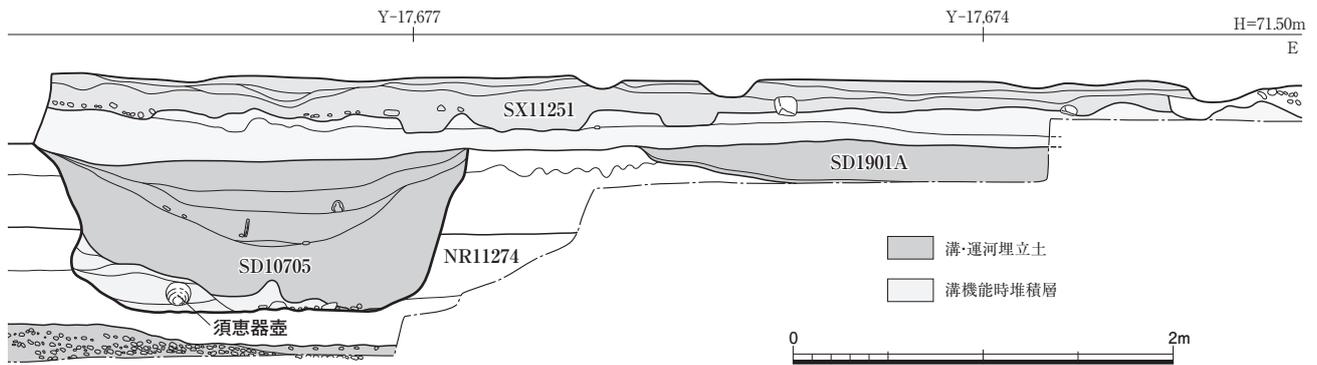


図117 土器埋納坑SJ11253 遺構・断面図 1 : 10



図119 土器埋納坑SJ11253 出土須恵器の内面



土器埋納坑SJ11254 西区中央部で検出した土坑。径30～35cmの不整円形で、遺構検出面からの深さは6cmほど。土坑内部からは土師器小皿と土師器甕が出土した(図120・121)。出土状況から、土坑内に小皿を重ねて置いた後、最後に甕を逆さに被せたと考えられる。小皿は26枚確認できたが、甕は頸部以下を後世の削平により欠損していることから、本来埋納された小皿の数はさらに多かったと考えられる。この土坑は、重複関係から、周囲の耕作溝より新しい。(若杉智宏)

溝状遺構SX11258 南北畦の西側を南北に貫く溝状の落ち込みで、藤原宮期の礫敷SX10888を掘り込んでおり、幅4.0m、深さ0.5m前後である。その東肩は南北畦とほぼ重なるためあきらかでないが、西肩は西区の南端から

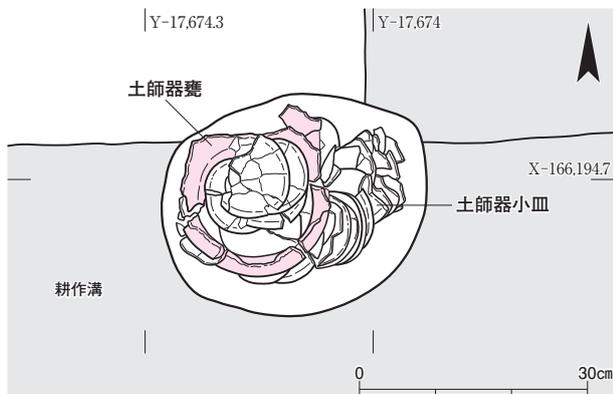


図120 土器埋納坑SJ11254 遺構図 1:10



図121 土器埋納坑SJ11254 (北から)

北端まで続き、さらに北へ延びる。埋土は灰褐色砂質土で、奈良時代から平安時代までの土器を含む。SX11258の西肩法面には花崗岩の巨礫を一石ずつ並べており(石列SX11252)、その主軸は北でやや西に振れる。石列の大部分は抜き取られており、抜取穴のみ残る部分が多い。石列より西側で整地層SX11251の東限付近までは、藤原宮期の礫敷と、それをおおう茶褐色土がのこり、石列の天端はこの茶褐色土上面にあたる。茶褐色土は奈良時代から平安時代までの土器を含む。SX11252の周囲には、石列の石材であったとみられる花崗岩片を多量に含む土坑SK11264がある。

土坑SK11262 西区中央付近、東西畦のすぐ北側で検出した小判形の土坑。長径2.7m、短径2.1mで、遺構検出面からの深さは1.2mである。埋土は上位から黄褐色砂質土、褐色土、青灰色土で、奈良時代の土師器小片のほか、巨礫・木片が出土した。

土坑SK11263 西区中央付近で検出した円形の土坑。直径2.8m、遺構検出面からの深さ0.5mで、南北大溝SD1901Aの埋立土に掘り込んでいる。埋土は黄褐色土である。奈良時代の土器片が少量出土した。

土坑SK11265 西区中央部で検出した土坑で、南北溝SD10705埋土を掘り込んでいる。埋土下半からは瓦が出土した。

土坑SK11266 西区西端で検出した直径0.8mの土坑。土師器甕が出土した。

古墳時代の遺構

古墳周溝SX11272 西区西半で検出した弧状の溝。幅1.8～2.0m、遺構検出面からの深さ0.3mで、埋土は黒色砂質土である。周溝からは円筒埴輪、土師器甕、須恵器甕が出土した(図116・122)。この溝は埋没後、南北溝SD10707、同SD10705(宮造営期)、土坑SK11262(宮廃絶後)によって破壊されている。SD10705より東側では削平を受けているが、もとは円墳(直径約15m)の周溝であったとみられる。墳丘は完全に削平されている。

自然流路NR11274 南北溝SD10705とSD10707の下位



図122 古墳周溝SX11272 (北西から)

に埋没した自然流路(図116)。流向は不明だが、堆積物は砂とシルトとの互層をなしている。層的位置からみて、古墳の造営以前に埋没したものである。(森川 実)

3 出土遺物

瓦 類

第182次出土瓦の種別点数は表18のとおり。軒丸瓦では6273A・B、次いで6275Aが多く、軒平瓦では6641E、次いで6643C、6641C・Fが多く出土した。これまでの大極殿院の調査では、大極殿で6273B-6641E、大極殿院南門で6275A-6643Cが所用瓦に比定されてきた。また、大極殿院回廊では所用瓦の特定にはいたらないものの、6273A・B-6641E、東面回廊で6281A-6641Fが多く出土する。今回の調査区は大極殿院南門と東面・南面回廊に隣接し、大極殿からも離れていない場所であるが、軒瓦の出土傾向も、過去の周辺の調査と類似する。

藤原宮造営期ないしそれ以前の遺構に限定すると、南北溝SD10707から丸瓦1点、平瓦1点、南北溝SD10705から丸瓦5点、平瓦3点が出土した。いずれも軒瓦はない。

以下、出土数が多い等、注目されるものを説明する。なお、製作技法によるグループ分類は石田2010の分類による¹⁾。6273Bは瓦当部から丸瓦部にかけての断面形状と瓦当側面の調整によりⅠ・Ⅱグループに分類され、今回は両グループとも出土。6274AはAaが和泉産、Abが日高山瓦窯産、Acには日高山瓦窯産のⅠグループとQグループの胎土のⅡグループがあるが、今回出土したのはいずれも日高山瓦窯産のAbおよびAcのⅠグループ。

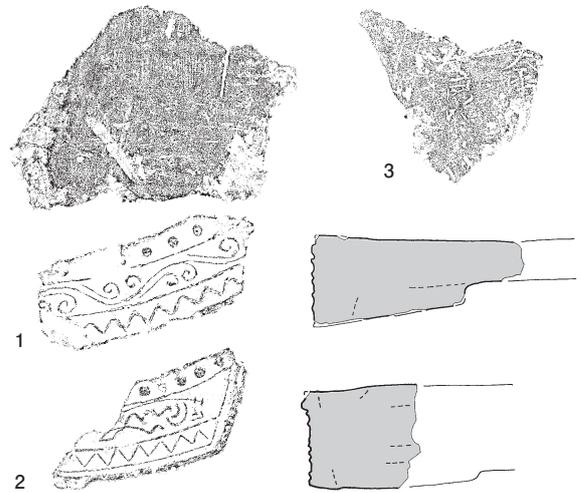


図123 第182次調査出土瓦 1 : 4

6275Aと6643Cは、NおよびN/Pグループと高台・峰寺瓦窯産があるが、今回出土したのはいずれも高台・峰寺瓦窯産。6641Eは23点出土しているが、範傷第2段階で凸面の縄叩きを消さないⅡグループのうち、曲線顎風のもの2点を含む。

6641Fは、これまで平瓦部凹面に「十」ないし「×」のヘラ描きをもつものが出土しているが、今回出土した8点中1点の凹面にもヘラ描きがある。1は欠損のため残存するヘラ描きは「|」のみであるが、「十」ないし「×」の一部の可能性もある(図123)。茶褐色土出土。

2は右偏行の変形忍冬唐草文の6647型式である。文様の構成は6647Hに似るが、該当部分の出土例がないため確定できない。暗灰色を呈しやや軟質で、直径3mm以下の砂粒、クサリ礫を少量含む。凸面の瓦当部付近に厚さ1.3cm程度の粘土板を貼り足して段顎を作る。顎面はナデ、凹面は横ケズリか(図123)。床土出土。

ヘラ描き瓦が64点出土した。平瓦は凹面に「キ」を刻むものがあり、一部欠損のため「二」、「一」に見えるものについても、本来は「キ」ないし「十」の一部の可能性はある。丸瓦も凹面に一部欠損した「二」、「一」が目立つが、凸面に「十」を刻むものを含む。

3は平瓦凸面にヘラ状工具で「奈」と「良」の文字を刻む。暗灰色を呈し、硬質で直径2mm以下の砂粒を少量含む。凸面は丁寧にナデをほどこし、凹面は未調整で布圧痕を残す(図123)。茶褐色土出土。

西区東半の茶褐色土より、丸瓦筒部凸面の側縁付近に長さ1~5mm、幅1mm以下の微細な飛沫状の赤色付着物

表18 第182次調査出土瓦集計表

軒丸瓦			軒平瓦			その他		
型式	種	点数	型式	種	点数	種類	点数	
6075	B	1	6561	A	1	面戸瓦	53	
6233	Aa	1	6641	Aa	1	鬘斗瓦	33	
6233	Ba	2	6641	Ab	1	隅切丸瓦	1	
6233		1	6641	C	7	隅切平瓦	1	
6273	A	22	6641	E	23	ヘラ描き丸瓦	7	
6273	B	14	6641	F	8	ヘラ描き平瓦	56	
6273	C	3	6641		8	文字瓦	1	
6273	D	3	6642	A	3			
6273		12	6642	C	1			
6274	AbまたはAc	9	6642		1			
6275	A	9	6643	Aa	1			
6275	B	2	6643	B	1			
6275	C	2	6643	C	12			
6275	D	1	6643	D	1			
6275		8	6643		3			
6276		1	6646		1			
6279	Aa	2	6647	Ca	1			
6279	Ab	1	6647	新	1			
6279	B	7	6647		1			
6281	A	4	四重弧文		4			
6281	B	3	不明		13			
6281		3						
不明		24						
計		135	計		93	計		152
重量(点数)		丸瓦	422.4kg (4,730点)	平瓦	1,656.1kg (25,459点)			

が無数に付く丸瓦片が出土した。赤色付着物の蛍光X線分析をおこなったところ、鉄分を多く検出したため、鉄系の赤色顔料が付着したものの可能性がある。周辺のいずれかの建物に塗布した赤色顔料が、瓦に付着したとも考えられるが、茶褐色土からの出土であるため他所からの混入の可能性も否定できない。(清野孝之)

土器・土製品・埴輪

木箱63箱分の土器・土製品と埴輪が出土した。このうち、土器・土製品には藤原宮造営期の遺構から出土した一群と、奈良時代から平安時代までの遺構・整地土から出土した一群とがある(図124)。

SD10705出土土器 土師器杯C(6・7)、杯G(1・2)、杯H(3~5)、盤、高杯、甕(8・11)と、須恵器杯B蓋(9)、杯A(10)、杯H、壺(12)、平瓶、甕がある。土師器杯C(6・7)はいずれもa0手法。土師器杯Gには、板ナデ痕を残す灰白色の1と、にぶい黄色の2とがある。土師器杯H(3~5)には大小2種がある。土師器甕は破片数が群を抜いて多く、図示したほかに数個体があり、

いわゆる「近江型」の甕(8)もある。須恵器杯A(10)は底部外面にヘラ切り痕をのこす。須恵器杯B蓋(9)はかえりを付したものである。須恵器壺(12)は最下層の灰色砂(溝機能時の堆積層)から出土した完形品である。これらの土器は飛鳥Ⅳに属する。

SX11251出土土器 土師器杯A(13・14)、杯C(15)、皿A(16~18)、椀C(19~21)、鉢(22)、高杯、甕、鍋(31)と、須恵器杯A(23~25)、杯B(27~30)、高杯、小壺(26)、鉢A(32)、甕、製塩土器(33)がある。このうち、土師器杯A、同皿Aには間隔の広い1段斜放射暗文を施すものが多く、杯Aは口径20.0~21.5cm、器高3.5cm前後(杯A I-2)である。須恵器杯Aは灰白色・軟質で、底部にはヘラ切り痕を残し、口縁部には重ね焼きの痕跡がある。

これらの土器は奈良時代中頃・平城宮土器Ⅲに属するとみられ、整地層SX11251の年代を知る手がかりとなる。

SK11267出土土器 小型の土師器甕(34)が出土した。

このほか、石列SX11252西側の茶褐色土および耕作溝出土土器には、奈良時代後半から平安時代までの土器がある。土師器には杯A、椀A、皿A(35・36)が、須恵器には金属器模倣の杯L(37)があるほか、緑釉陶器片・猿面硯・土錘も出土している。(森川)

SJ11253出土土器 38は須恵器杯B蓋、39は須恵器杯B。38は屈曲する端部と平らな頂部からなり、頂部外面はロクロナデ調整。39の高台は底部外縁に位置し、口縁部外面にはカキ目を施す。底部外面には「+」の墨書がある。これらは奈良時代中頃から後半までに属している。

SJ11254出土土器 40~66は土器埋納坑SJ11254から出土した。40~65は土師器小皿。いずれも口径10cm前後で、器高は1.5~2.0cm。55の口縁端部内面の一部には煤が付着しており、灯明器に用いている。66は土師器甕で口縁端部は内側に肥厚する。これらは10世紀末頃に位置づけられる。

埴輪 古墳周溝SX11272やその上部の包含層からは、多くの埴輪が出土した。普通円筒埴輪、楕円筒埴輪、朝顔形埴輪がある(図125)。1は楕円筒埴輪で、口径は長径36.4cm、短径24.2cm。口縁部高は17.2~17.9cm。2孔の円形透孔があき、最上段の両面にはヘラ記号が入る。突帯剥離面には方形刺突がみられる。また、1と接合はしないが同じハケ目パターンをもつ楕円筒埴輪の底部の

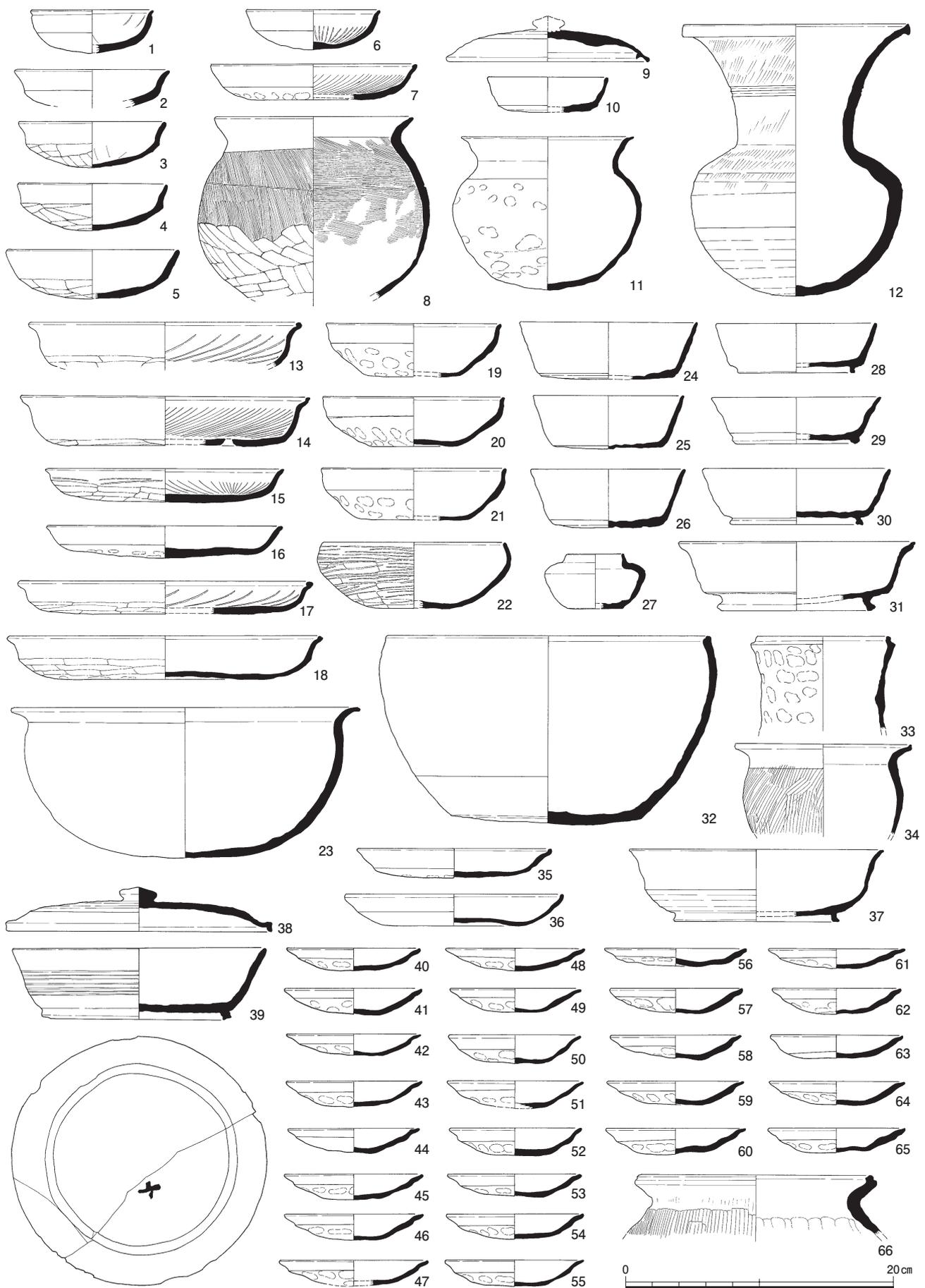


図124 第182次調査出土土器 1 : 4 (1~12 SD10705、13~33 SX11251、34 SK11267、35~37 茶褐色土、38・39 SJ11253、40~66 SJ11254)

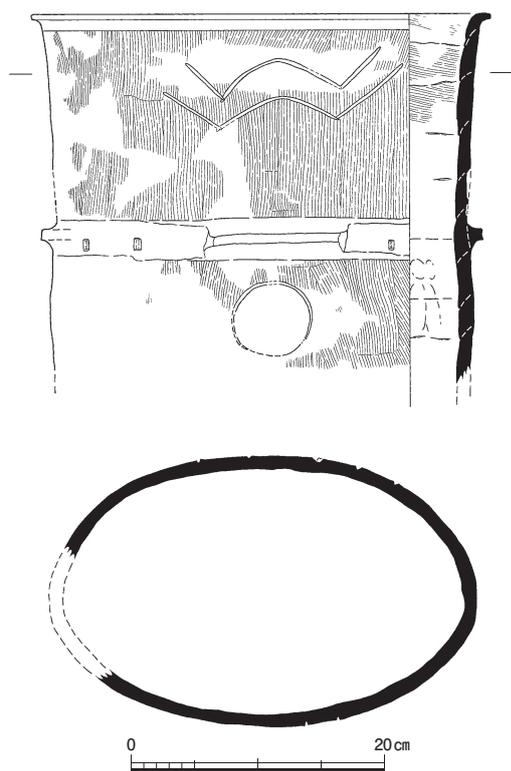


図125 古墳周溝SX11272出土埴輪 1 : 6

資料があり、底部高は18.5cmである。

普通円筒埴輪は楕円筒埴輪とほぼ同じ形態的特徴を有する。残存状態の良好な口縁部付近の資料が1点あり、口径は約35cm、口縁部高は17.3~18.5cmで、1と類似するヘラ記号をもつ。これらの埴輪は川西宏幸氏の円筒埴輪編年Ⅱ期後半に位置づけられる²⁾。(若杉)

金属製品・石製品・木製品・獣骨

金属製品 SJ11253より出土した和同開珎5枚はいずれも隸開の新和同である(図126)。また床土から銭貨6枚が出土したが、銭文が推定できるものは乾元大宝1点のみである。このほか耳環がSD10707の埋土より出土した。

石製品 西区では碧玉製管玉1点、滑石製白玉10点、紡錘車1点が出土した。(大谷育恵)

木製品 SD10705からは斎串が28点以上出土した(図127)。材は厚み、幅ともさまざまである。両側縁に削り込みを入れないもの(1・2)、両側縁に削り込みを入れたもの(3~8)がある。9は刀子状の形状をした用途不明品で柄部に穿孔がある。同じくSD10705出土。いずれも仮道管、樹脂細胞、放射柔細胞からなる針葉樹材で、遺存状態はわるいがヒノキ型の分野壁孔が1分野に2個、観察される箇所もあることから、ヒノキ属と同定した。(大谷・星野安治)

獣骨 SD10705やSD10871からウマやウシの骨が出



図126 土器埋納坑SJ11253出土銭貨 1 : 1

土し、とくにウマが多く認められた。SD10871では基節骨、中節骨、末節骨が連結した状態で出土し、肢先を切り落としたものと考えられる。(山崎 健)

4 まとめ

藤原宮期の礎敷広場を確認 今回の発掘調査では、大極殿院内庭の東南部において藤原宮期の礎敷広場を確認した。調査区内における礎敷の標高は、東区の南端が71.4m前後で、大極殿院の南面回廊を挟んだ朝堂院朝庭北端付近の礎敷とほぼ同じ高さであるが、北側にむけて緩やかに傾斜していることがあきらかとなった。一方、西区西半の礎敷は削平により残らないが、これは内庭の礎敷が、大極殿の前面でもっとも高かったことを暗示するとみられる。

宮造営期の遺構を確認 造営期の遺構として東西溝1条、南北溝3条、斜行溝1条、運河を検出した。南北溝SD10801Bは大極殿院南門の造営に際し、南門を避けて東へと迂回させた溝とみており、今回の調査でさらに北へと延びることが判明した。また、同溝から分岐する斜行溝SD11250を新たに検出し、藤原宮の造営過程を考えるうえで重要な手がかりを得た。南北溝SD10705と東西溝SD10871は、既往調査の成果を考慮するとそれぞれ先行朱雀大路東側溝、先行四条大路北側溝にあたる。両者の埋立土はほぼ共通し、SD10705では斎串・獣骨などが出土した。斎串の出土は先行条坊側溝では珍しいが、先行四条大路と先行朱雀大路との交差点に近いこととの関連性がうかがわれる。

宮廃絶後の遺構群 奈良時代には大極殿院南門の跡地付近で、掘立柱東西棟建物が南北に2棟並ぶことが判明していたが、今回の発掘調査では、その一方にあたるSB10715の規模が確定した。今回、SB10715の規模が確

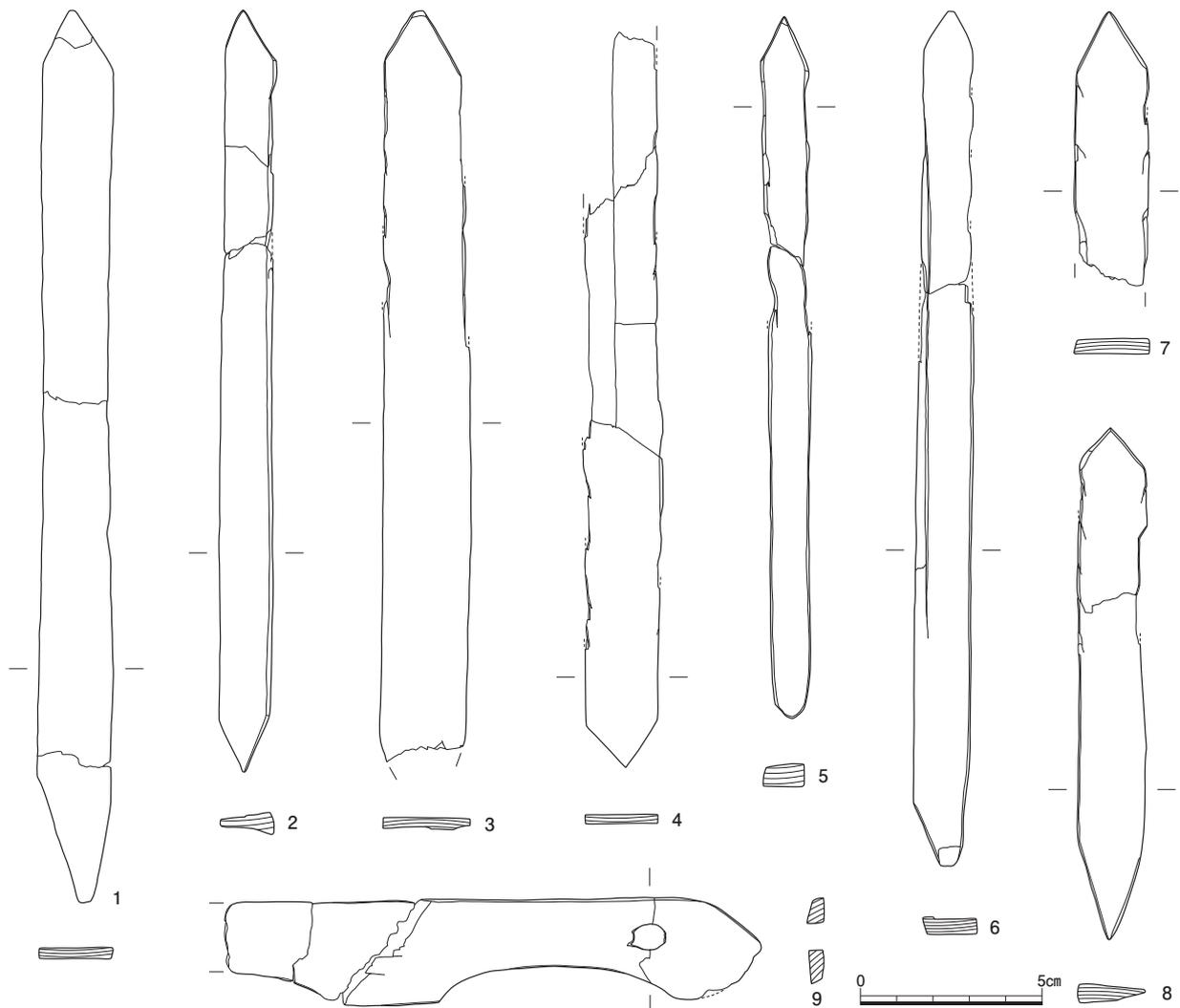


図127 第182次調査出土木製品 1 : 2

定したことで、SB10715と大極殿院南門の基壇跡に建つ東西棟掘立柱建物SB10714とが同規模の建物であることがあきらかになった。両者は両妻を揃えているうえに、SB10714の北側柱列とSB10715の南側柱列とが18.0m(60.0尺)を隔てていること、さらに建物の南北軸が北でわずかに西偏することから、奈良時代中頃に造営された計画的な建物群と考えられよう。土器埋納坑SJ11253や整地層SX11251も奈良時代中頃のもので、建物群の造営と整地・地鎮とは同時期と考えられる。

掘立柱建物SB11256と土器埋納坑SJ11254は、出土土器からいずれも平安時代に降るもので、SJ11254は10世紀末頃の地鎮遺構である。周辺では、大極殿院南門の基壇跡付近で掘立柱建物SB10718・SB10719・SB10720・SB10721を検出している(第148次調査)。今回検出した

SB11256・SJ11254とあわせ、平安時代における土地利用の一端があきらかとなった。

宮域内における古墳の発見 藤原宮の造営時に破壊された古墳の周溝を発見した。藤原宮の周辺では、朱雀大路や周辺の造成にともない改葬したとみられる日高山横穴や、日高山1号墳などがある。藤原宮でも朝堂院地区は埴輪の出土量が多く、東第四堂の調査(第144次)では古墳の周溝も見つかっている。今回の調査で発見した古墳とあわせ、宮造営以前の景観を考える上で重要なてがかりとなろう。(森川)

註

- 1) 石田由紀子「藤原宮出土の瓦」『古代瓦研究 V』2010。
- 2) 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64-2・4、日本考古学会、1978・1979。